



# ユーラシア ホットライン

VOL-4

1998年3月発行

## ●講師が語る連続文化講座●

### 「私の講座のポイントと概要」 〈前期〉

#### 【4月のテーマ：民族と国家の狭間】

##### ①4月11日（土）「オロチョン人として生きて」

岩間 典夫先生・黒龍江省中国国際旅行社顧問

“満蒙開拓青少年義勇軍”の一員として戦時下の中国・満州に渡った時は14歳だった。訓練所は、夢を打ち砕く飢餓収容所。そこで仲間の少年たちと反乱、所長を襲撃し、憲兵隊に捕まり義勇隊矯正施設に送られた。所長の不正が明らかになって釈放。以来敗戦、シベリア抑留。18歳だったために満州へ送還。中国人民解放軍そしてオロチョン族と出会ったことで人生は決した。以来50年余り、オロチョン人として生きた。今一緒に帰国した妻、息子夫婦は日本人として 生きるために苦勞している。私はオロチョンのために何ができるかと努力している。私が生きたオロチョンの暮らしと現在を紹介する。

##### ②4月17日（金）「ユーラシアの未来と北朝鮮の行方」

迎 真一先生・コリア・レポート編集長

朝鮮半島は日本と大陸を繋げる架橋ともいえる。その架橋は北緯38度線で南北に切断されたままだ。日本とシルクロードを結ぶラインは朝鮮半島で消えている。21世紀に南北の橋が繋がるかどうかは、高句麗の末裔、北朝鮮の行方にかかっている。北朝鮮が変われば、中国の遼寧省・山東省～北朝鮮の南浦～韓国の仁川を通じた「黄海経済圏」も、ロシアのウラジオ～北朝鮮の羅津～韓国の釜山に繋がる「日本海経済圏」も開かれる。

##### ③4月24日（金）「渤海王の使者」

高橋 義夫先生・作家

10世紀から12世紀にかけ、北東アジアに栄えた渤海国と日本は、2世紀にわたって平和的交流をもった。渤海国とはどのような国だったのか、漢詩、音楽、遊戯などを通じて、渤海文化と日本文化がどのように接触したのかを、残された文献から考える。また、渤海国の城址の現況を含め、現代の「日渤交流」の可能性について、観光案内的に紹介する。

#### 【5月のテーマ：ユーラシアの潮流】

##### ①5月15日（金）「文明の交差路・ガンダーラ」

服部 英二先生・ユネスコ事務局長顧問、麗澤大学教授

インド亜大陸をユーラシアの西方のペルシャ諸国・北方の中央アジア・東方のシナと結んでいたのが、インダス河上流のガンダーラの地である。ヒマラヤ・カラコルム・ヒンドークシュの峻険な山々に囲まれながら、この地は勝れた「文明の交差路」であった。アレクサンダー大王・アショカ王・カニシュカ王・法顕・玄奘等々、世界文明史を彩った人々がこの地に足跡を残している。

大乘仏教はこのガンダーラで成立する。それは仏像の誕生、菩薩の出現と共に起る。これ以来仏教は衆生のもとなり、シルクロードを通して長安に至る。この源となった「出会い」は何であったか、を探る。同時に最近発見されたカラコルム・ハイウェイ添いの岸壁画を紹介し、「形」の意味について考える。

##### ②5月22日（金）「世界史を変貌させたモンゴル」

杉山 正明先生・京都大学教授

近年、西欧中心主義への疑問がよく言われ、またソ連の崩壊と東欧の民主化がおこってからは、民族や国民国家という考え方についても見直しが求められています。私たちが主に戦後に教え込まれてきた世界史像は、19世紀型の近代西欧文明の立場から語られてきたものでしたが、それはかつて本当にあった世界史とは程遠いものでした。ただし、一口に世界史を見直すと言っても、闇雲に西欧中心史観に文句をつけるだけでは駄目で、しっかりした根拠と事実が必要です。その一つの有効な切り口は、13、14世紀に出現し、ユーラシアをゆるやかにまとめ上げたモンゴルです。モンゴル帝国とその時代を辿りながら、新しい世界史への道を探ってみたく存じます。

##### ③5月29日（金）「イスラムとトルコ民族主義の潮流」

坂本 勉先生・慶応義塾大学教授

ソ連邦、バルカン諸国の社会主義体制が崩壊したことによって現在、ユーラシアのトルコ民族世界—中央アジア、アゼルバイジャン、そしてトルコ共和国はかつて経験したことがないような変動に見舞われている。社会主義にかわって民族主義、イスラム

が息を吹き返し、大きな影響力をもちつつあるが、その現状と行方を歴史をおさえながら話していくことにしたい。拙著『トルコ民族主義』(講談社現代新書)をあらかじめ読んでおいていただけると幸いである。

## 【6月のテーマ：フィールドレポート】

### ①6月5日(金)「等身大の中央アジア—クルグズ(キルギス)人の暮らしと変化」

吉田世津子先生・東京都立大学大学院博士課程

中央アジアの小国・クルグズ(キルギス)共和国は、ソ連の崩壊により1991年に独立しました。住民の多数を占めるクルグズ(キルギス)人は、かつては遊牧生活を営んでいましたが、ソ連時代、ソ連以後の時代を通じて生活の隅々、社会の隅々にまで及ぶ大きな変化を経験してきました。その社会の大変化を、あるソフホーズの解散を通して報告します。

### ②6月12日(金)「シベリア少数民族の英雄叙事詩

— サハ(ヤクート)、アルタイ、ハカス、トゥバについて—

山下 宗久先生・千葉大学大学院博士課程

東シベリアのサハ(ヤクート)と、南シベリアのアルタイ、ハカス、トゥバの英雄叙事詩の映像資料と音声資料をご紹介します。これらの民族の英雄叙事詩が実際にどのように語られ、歌われているのかを見てみたいと思います。また、原語テキストも用いながら、英雄叙事詩を形式的側面と内容的側面に分けて解説します。英雄叙事詩の持つ美しさとおもしろさを実感していただければ幸いです。

### ③6月19日(金)「イテリメンの暮らしと言語」

小野智香子先生・千葉大学大学院博士課程

イテリメンはカムチャツカ半島に居住する先住少数民族である。イテリメン語はコリヤーク語、チュクチ語などとともにパレオアジア諸語のチュクチ・カムチャツカ語族に属するとみなされている。イテリメンは17世紀末から18世紀初めにはカムチャツカ半島の大部分を占めていて、漁労、狩猟、採集で生計を立てていたがその後人口が減少し、現在は主にカムチャツカ半島西岸のコリヤーク自治管区(ロシア共和国)に居住している。1989年の旧ソ連の調査によると、イテリメンの人口は2429人で、そのうちイテリメン語の話者数は562人(約23.2%)である。彼らの言語について、伝統的な生活を反映した語彙や言語生活の現状について考察する。

## 〈後 期〉

## 【10月のテーマ：ユーラシアの古代文字】

### ①10月17日(土)「ユーラシア古代文字の系譜」

森安 孝夫先生・大阪大学教授

かつての四大農耕文明圏ではいずれも固有の文字を創出したが、現在世界中で用いられている文字の系譜は、その内の2つだけといっても過言ではない。即ちアルファベットと漢字である。漢字の本場の中国でさえピンインというローマ字システムを使う今となっては、極端な話、日本以外の全世界はアルファベットに征服されたとさえ言える。国際化のために日本もローマ字化せよとの議論は、私は与しないが、時代の趨勢ではある。

それはともかく、ユーラシア中央の西アジアに生まれたアルファベットが、西方のギリシア・ローマ・ロシア文字へと発展し、大西洋を越えたのに対し、東方ではアラム・ソグド・ウイグル・モンゴル・満州文字という系譜により、遂に太平洋にまで到達した。さらには起源を同じくするが別の系統として、西アジアのアラビア・ペルシア文字、インド～中央アジアのカロシュティ・ブラーフミー・チベット文字があり、さらには突厥文字(ルーン文字)やバスバ文字やハングルまで生み出すに至った。

一方、漢字からはカタカナ・ひらがなの外、契丹・西夏・女真文字が作られた。これら全体を概観するとともに、遊牧騎馬民族が活躍し、シルクロード貿易の舞台となった中央アジアから出土した6～14世紀の文書・碑文に使われる文字についてやや詳しく紹介したい。

参考文献: 森安孝夫『ウイグル=マニ教史の研究』(6000円); 『内陸アジア言語の研究』12号、(2500円)。いずれも京都、朋友書店(TEL.075-761-1285; FAX.075-761-8150)取扱。

### ②10月23日(金)「モンゴル高原の古代トルコ語碑文調査」

片山 章雄先生・東海大学助教授

モンゴル高原で突厥(6～8世紀)やウイグル(8～9世紀)の古代トルコ語碑文が複数発見され、調査解読が始まったのは19世紀末のことだった。既知の有名な碑文は後に発見された諸碑文とも対照研究され、いまさら新知見は出ないとも思われた。しかし1996～97年のモンゴルとの共同調査で、突厥のキョル・テギン碑文やオンギ碑文、ウイグルのカラ・バルガスン碑文に関し、断片接合や拓本の信憑性など新発見があった。これらを軸に報告したい。

参考書物:

D・マイダル、加藤九祚訳『草原の国モンゴル』(新潮選書)、新潮社、1988年  
小長谷有紀編『アジア読本 モンゴル』河出書房新社、1997年  
『モンゴル展(図録)』国立民族学博物館、1998年(夏に開催・刊行予定)

### ③10月30日(金)「ユーラシア古代“記号文字”の謎」

宇田川 洋先生・東京大学教授

ユーラシア東部地域にも古代文字が発見されている。中国では甲骨文字があり、シベリアには突厥文字(碑文)がある。わが国では初期ヘブライ文字の存在を説明する人もいる。ところで北海道でも、著名な余市町フゴッペ洞窟や小樽市手宮洞窟において文字に類するものが確認されている。1997年にはそれらをめぐって「手宮洞窟シンポジウム」が開催されたが、それらの成果を紹介しながら、「記号文字」の謎を追ってみたいと考える。

【11月のテーマ：歴史を作った人々】

### ①11月13日(金)「司馬遷と李陵」

林 俊雄先生・創価大学教授

ユーラシア草原に独自の文化を作り上げた騎馬遊牧民たち、しかし7世紀以前、彼らは文字を持たなかったため、その古代の歴史記録は隣接する定住農耕文明の著作の中にしか残されていない。その多くが自分の価値観で彼等を「蛮族」視する中で、草原地帯の自然環境上の特性を理解し、遊牧民の存在を相対化して客観的に眺めることのできる具眼の士もいた。その代表が西ではヘロドトス、東では司馬遷である。

匈奴国家の中では、多数の定住地帯出身者が、それぞれの役割を果たし大きな貢献をしていた。その一人、史書・文学作品では「悲運の将軍」として描かれる李陵を通し、司馬遷及びその歴史観やユーラシア草原の時代背景を探る。

### ②11月20日(金)「ユーラシアの交易とソグド人」

吉田 豊先生・神戸市外国語大学助教授

中央アジアがイスラム化する以前の時代、シルクロードを行き来する商業民族として活躍したのがソグド人でした。彼らはアマダリアとシルダリアに挟まれた地域に住むイラン系の民族でしたが、現在は存在していません。この講座では、ソグド人の歴史や文化について概説し、それらの中で特にシルクロードを通じて起こった異文化との接触によって成立したと考えられる事物や、東西の文化交流にソグド人が果たした役割について触れる予定です。

### ③11月27日(金)「マルコ・ポーロの謎」

杉山 正明先生・京都大学教授

マルコ・ポーロとその旅行記については、はじめからある前提が人々の頭を占めてきました。それは、ともかくマルコ・ポーロという人物が歴史上確かな一人の人間として存在し、モンゴル時代のユーラシアを東西に大旅行したということ、もうひとつは俗に『東方見聞録』と呼ばれるその旅行記は、はじめからちゃんとした書物として記され、西欧各地に伝わる写本は、あくまでその「原本」からの写しか節略本であるということの二点。しかし、モンゴル時代の原典史料を扱っているものには、ともに大いに疑問です。マルコ・ポーロにまつわる根本からの疑問をお話させていただきます。

【12月のテーマ：フィールドレポート】

### ①12月4日(金)「ダルベルジン・テペ(ウズベキスタン)の発掘調査」

堀 暁先生・古代オリエント博物館研究部長

古代オリエント博物館では1996年以来、ウズベキスタンの南部、アフガニスタンとの国境の近くにあるダルベルジン・テペの発掘調査を行っている。この遺跡はグレコバクトリア時代に建設が始まり、クシヤン朝からクシヤノ・ササン朝時代にはこの地域の中心的な都城に成長し、漆喰で造られた菩薩や仏陀尊像で荘厳された大規模な仏教寺院も建設されている。私たちはチタデル(城砦)の上層と墓地を発掘しており、それらの成果について紹介する。

### ②12月11日(金)「内モンゴル自治区岱海地区遺跡群の調査」

大貫 静夫先生・東京大学助教授

岱海は内モンゴル自治区の区都フフホトの東約100kmに位置する湖である。明代の長城は岱海のすぐそばを通っているように、この地域は古来、遊牧民と農耕民の交錯した地域であり、新石器時代にはこの地域は農耕民の世界であり、それがその後遊牧民の世界に変わって行く。その農耕民と遊牧民がこの地域にどのようにして出現し、また交替したのかを日中共同で1995～1997年の3年間調査してきた成果をもとに紹介する。

### ③12月18日(金)「寧夏回族自治区原州遺跡群の調査」

谷一 尚先生・共立女子大学教授

95～96年、文部省科学研究費を得て日中合同の原州聯合考古隊を組織し、中国寧夏固原の原州遺跡で95年に唐・史道洛墓(658年葬)を、96年に北周・田弘墓(575年葬)を発掘した。史道洛墓では、墓誌、金銀極彩色の鎮墓獸・俑、東ローマ金貨、六曲ガラス杯などが、田弘墓では、墓誌、朱・白・黒の彩色人物壁画、玉器、5点の東ローマ金貨など貴重な遺物が多数出土した。本講ではこれらの出土品を中心に、シルクロードを通じての古代の文化交流の諸相について考察する。

# ユーラシア ニュース

## ◆インターカレッジ文化講座を国際交流基金が名義後援決定

このたび、インターカレッジ文化講座について、国際交流基金の名義後援申請が受理されました。今後、ユーラシアンクラブの98年度文化講座は「国際交流基金による後援」を受けていることを表示します。

## ◆ユーラシアンクラブ「舞台芸術フェア」にブース出展

「ユーラシア芸能祭」実行委員会参加を呼びかけ

昨年、新潟県小出郷文化会館でユーラシアコミュニケーションフェスを共催したクラブは今年も同会館でフェス開催の予定ですが、来年度以降、継続的に「ユーラシア芸能祭」を開催するため、2月17、18日、東京・初台の新国立劇場で開催された「舞台芸術見本市」で「実行委員会」の設置・参加を呼びかけ、300人近いホール運営担当者に企画案その他資料を手渡しました。

呼びかけ人は、「フェス」関係者のほか、ユーラシアの芸能の専門家、これまでユーラシアンクラブの活動を支持して下さっている芸術文化団体の関係者、歴史文化に理解の深い経済関係者、大使館関係者などが加わっており、ウズベク大使館、モンゴル大使館が実行委員会への後援を決めました。フェアの会場にもザヒドフ・ウズベク大使館一等書記官が顔を見せ、民族衣装を持参したり、自らビデオカメラで収録。日本シルクロード倶楽部、日本口琴協会も会場でチラシを配布、内モンゴルの歌手、オドバルさんも資料を出展しました。呼びかけの対象は、主として公立ホール。3月中に第1回実行委員会を開催し、多くのホールへネットワーク形成を呼び掛けたいと思います。また継続開催のためのスポンサー、メセナも募集します。

チュコト半島の舞踊団エルギロン招聘を皮切りに、毎年継続して芸能祭を開催できる長期的枠組作りに取り組むことにしました。

(今後の段取り)

- 1) ユーラシアの芸能専門家、実演家、文化交流団体、公立文化施設、協力団体、機関と実行委員会を結成
- 2) 昨年に続き、7月25、26日小出郷文化会館でユーラシア芸能祭を開催
- 3) 秋口に芸能祭開催実行委員会を開催
- 4) 参加ホールを確定、芸能祭実施概要確定
- 5) 11月、助成金申請
- 6) 民間企業へメセナ協力要請
- 7) 1999年、各地のホールで地域の民族芸能グループ等と芸能祭開催

## ◆大使館が後援決定

モンゴル国大使館とウズベキスタン大使館は、「ユーラシア芸能祭」開催を後援することを決めました。芸能団を日本に派遣するためのビザ発給などで協力していただくほか、さまざまな芸能団情報の提供をすると約束しています。

## ◆渤海船で三井商船と話し合い

渤海建国1300年記念事業として提案した「現代の渤海船」で、1月末、環日本海交流促進懇話会を開催。「渤海船」の構想と具体化のための段取りについて話し合いました。

出席したのは、座長の金森久雄・日本経済研究センター顧問のほか、商船三井客船部の取締役、担当課長、島根、新潟等のシンクタンク関係者、JTB、朝日サンツアーズ、関ジュエスなど旅行関係者及びマスコミ人ら14人。

「日本海からユーラシアへ」という夢を込めて、渤海船実現の可能性や困難さなどについて話し合いました。次回の懇話会は3月から4月にかけて開催の予定で、地域のシンクタンク関係者も出席の希望が強く、さらに多くの出席者が見込まれます。

「渤海船」は、「環日本海交流の船」の性格を持たせ、船上で環日本海芸術祭や歴史、文化、経済等のセミナーを開催しながら、渤海

国の都や日本に向けて渤海使節が往還した「日本道」や使節が渡海した港湾関連遺跡などを訪ねます。少数民族を初め、環日本海の諸民族が交流する異文化交流の船といった計画にしたいと考えていますが、大野としては毎年交流船を出すため、日本海沿岸の自治体、諸団体が協力できないかと提案しています。

## ◆民博で特別展「草原の遊牧文明—大モンゴル展」

遊牧の暮らしから遊びまで、モンゴルをさまざまな角度から理解しようという展覧会が大阪府吹田市の国立民族学博物館で開催されます。

時期：1998年7月30日—11月24日まで

## ◆民族料理を食べる会

ユーラシアの民族料理を食べ、在日のユーラシア人と交流する「民族料理を食べる会」が好評のうちに終了しました。延べ100人が、ヴィザの要らない民族料理で5つの国境を越えました。

## ◆米沢幹事ナナイの村へ

沿海州の先住民族への山菜加工技術セミナーの先鞭をつけた米沢の荒井幹事が、この3月、シカチアレン村を訪ねます。今回は知人の米沢市内のお医者さんも同行。難病で苦しむ前村長の息子にも面会する予定です。

## ◆モンゴルゲルイベント

直径6mのゲルを利用したユーラシア体験ミニ文化館。現在東京都、八王子市、国立オリンピック記念青少年センターと話し合いです。ユーラシアの民族文化フォーラムを多彩に実施するべく実行委員会を発足する予定。ニュースレターの次号ではご連絡できる見込です。

## ◆オドバルさん お母さんに

内モンゴル出身の歌手オドバルさんに2月18日、待望の赤ちゃんが誕生しました。男の子で3560グラム。母子ともに健康です。

◆学校建設の支柱立ち、レンガ積み始まる／ネパールへの支援進む神戸市の三宅さんが中心となって進めている、ネパール支援活動が進んでいます。

ライオンズクラブや絵画団体の協力で学校建設が始まり、支柱の設置やレンガ積みなどが進行中です。

## ◆<お知らせ> ニュースレターの名称を次号から変更

本紙の紙名「ユーラシアンフォーラム」(現行)が、3月号より「ユーラシアンホットライン」(新)に変わります。

これまで、ユーラシアンクラブの会報が「ユーラシアンホットライン」、昨年秋から発行のニュースレターは「ユーラシアンフォーラム」として発行して来ましたが、「ホットライン」という紙名は、速報性を重視するニュースレターにふさわしいこと、一方、会報は、ユーラシア諸民族のさまざまな人々による一人称の投稿をベースとしたものであり、こちらは文字通り「ユーラシアンフォーラム」であると考えられることから、今後、紙名を変更いたします。

## ◆ニュースレター継続購読のお願い

昨年11月刊刊の本紙も、今回で第4号となりました。出来るだけ多くの方々に情報をお届けしたいと願い、会員以外の方にもお送りしてまいりましたが、郵送料その他の経費等の都合により、会員以外の方への無料送付は今回までとさせていただきます。今後も購読をご希望の方は、お手数ですが当クラブまでお申し込み下さるようお願い申し上げます。

クラブ正会員及び、会報購読会員の皆様には今後も継続してお送り致します。

<クラブに関するお問い合わせ先>

〒215-0013 神奈川県川崎市麻生区王禅寺 2485-2-204

TEL 044-965-2536 FAX 965-2537